沖縄県恩納村・名護市・本部町における緑化木の生産・流通構造

琉球大学農学部 謝名堂 聰
篠 原 武 夫

Ⅰ はじめに

都市化は都市から急速に緑を少なくしており，近年とくに街路樹，公園の樹木，個々の建物などに対する樹木の役割が認識され，都市景観の重要な要素となっている。沖縄県においても本土復帰以後，沖縄県振興開発事業などによる公共工事の増大や観葉植物の県外出荷により，緑化木の需要は増加の傾向にある。特に観葉植物の生産は，亜熱帯気候を生かし，他県よりも有利な条件にありながら「生産しても売れない」といった流通面の不安が先行し，伸び悩んでいた。しかし沖縄県北部の恩納村を中心に県外出荷が相つぐようになると，生産農家も意欲を見せだして，生産者数，生産量ともに急速に伸びだした。最近は本土における温室栽培のコスト高とも関連し，県内の緑化木生産の有利性が高まったとして，生産拡大の機運が高まり，花木観葉類を中心に団地化が進んでいる。

このように緑豊かな快適な生活環境を整備するために緑化事業は緊急かつ重要な事業となってきているが，緑化木の需要の動向に対応した緑化木の生産・流通体制は十分確立されておらず，それに関する調査研究もほとんどなされていない状態である。

そこで本論文では，以上のような問題を解決する為の基礎的資料を得るため，本県でも緑化木の生産で代表的といわれている恩納村を中心に名護市と本部町における緑化木の生産・流通構造の特質を明らかにする。

Ⅱ 恩納村の緑化木の生産・流通構造

① 恩納村農業協同組合　　恩納村の生産は昭和48年八丈島からドラセナ類の苗木を移入して生産を開始したのが始まりである。生産者数及び生産実績の推移は表－1，表－2の通りである。現在，多く栽培されている樹種はシーフレラホンコン，アレカヤシ，竹ヤシ，ガジュマル，ナンヨウスギなどである。恩納村の緑化木の流通経路は図－2の通りである。現在，出荷量の約6割が農協を通して名古屋や東京のセリ市場へ出荷され，残り4割は県内で消費される。観葉植物の一般的な価格は表－3に示す通りである。秋から春先にかけては価格も上昇し出荷量も増えるが，夏場は需要が減るため出荷をひかえている。

②インプガーデン　　普天間直松氏は復帰以前の昭和45年から観葉植物の生産をてがけており，村内でも中心的な存在で他の観葉植物生産者の指導や助言を行なっており，県内一を誇る亀ノ浜観葉植物生産団地（組合員4名）の組合員である。同氏は以前から自分のトラックで県内販売を行なっていたが，村内での県外出荷が軌道にのりだしてからは県外出荷も行なうようになった。現在でも本島中南部を中心に70％が県内業者への出荷である。又，東南アジアや県外から種子を仕入れ，苗にしたてて県内外への出荷も行なっている。

③瀬良垣緑化木生産組合　　同組合の組合長である当山安秀氏は以前から県外で生産を経験しており，恩納村が県外への出荷を行なう際に功労のあった村内の先駆者であり指導者でもある。現在8割が県外出荷で残りが県内出荷である。県外出荷はすべて農協を通して出荷している。

④泉川園芸　　経営者の泉川良光氏は恩納村が観葉植物の生産に力を入れだした昭和49年に生産を開始した。1品種1万本単位で生産し，年間10万鉢を出荷している。同氏は，当初自分の4トントラックで出荷を行なったのがきっかけで今では本島中北部を中心に他の生産業者の出荷を一手にひきうけて出荷も行なうようになった。

Ⅲ 本部町の緑化木の生産・流通構造

①伊良波農園　　伊野波幸秀氏は昭和57年秋から出荷を行なうまだ新しい生産農家である。3年前の生産開始以前は恩納村内の緑化木生産業者の下で勉強していた。現在は1,400坪のハウスを所有しており，バッサイヤ，ガジュマル，竹ヤシ，アレカヤシ，サンスベリアなどを栽培している。出荷の際の流通経路は未定であるが昭和57年秋で2,000鉢の出荷を予定しており，将来は本部町の農協を通すつもりであるが，農協にはまだ集出荷場もなく安定した流通経路がないので，当分は県内の業者を通して出荷する予定である。

②伊野波農園　　伊野波盛幸氏は以前から造園木の販売と施工を行なっていたが，更に昭和53年から観葉植物の生産もてがけた。はじめは苗木や資材を県内業者から購入し実験的に生産していたが，生産量が伸

びだすと本格的に生産に取り組みだした。生産面積はハウス500坪，露地400坪でアレカヤシ，ドラセナ類，ナンヨウスギなどを生産している。ほとんどが県外出荷で県内の輸送業者に運んでもらっている。将来はハウスを造やして生産量の増大を図る計画である。

Ⅳ 名護市の緑化木の生産・流通構造

①湖水園　同園経営者の比嘉繁栄氏は昭和46年に5haの土地を借りて緑化水の生産を始めた。主な生産樹種はシャリンバイ，リュウキュウマツ，イヌマキ，観葉植物としてベンジャミナ，オオタニワタリ，ナンヨウスギなどである。出荷量は年間6万鉢をめどに生産を行なっているが，現在は予定の出荷量に達していない。出荷先はすべて県内であり，造園業者や貸鉢業者が買いつけにくる。

②沖縄緑化開発センター　同センターは生産を農家にも委託して全国農協ルートを通して販売する方法を予定していたが，現在は沖縄県経済連へ農家や農協から注文がきたものを生産する程度にとどまっている。同センターの生産面積は57,000坪，うちハウス面積1300坪で，東京，関西などからアレカヤシ，ナンヨウスギ，ガジュマル，シーフレラホンコン，バッサイヤの五品目の種を移入して栽培している。消費先はほとんどが県内であり，観葉植物だけで2万鉢の出所を行なっている。

Ⅴ 結論

恩納村では生産者，農協，役場が一体となって緑化木の生産に力を入れており，生産量，生産額ともに年々順調に伸び，農協を通じて定期的に本土に売りこめるのは県内でも恩納村だけである。このように村全体で緑化木経営に力を入れているのは県内でも特異であり，これからの経営の在り方を示す一つの方向として注目される。

本部町は，観葉植物生産においては，まだ新興産地であり，流通経路の確立や市場との提携が不十分であるため，集出荷場の設備や量産体制を整え早急に独自の流通経営をもつ必要があると思われる。名護市でも観葉植物の生産販売は活発でなく，このことは，しっかりした流通経路をもっていないのが原因であると思われる。

表－1　恩納村の緑化木生産者数の推移

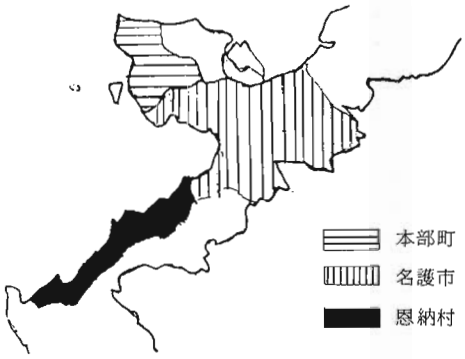
年　度	昭49	昭50	昭51	昭52	昭53	昭54	昭55	昭56	昭57
生産者数（人）	9	11	15	18	19	不明	不明	22	22

表－2　恩納村の緑化木生産実績

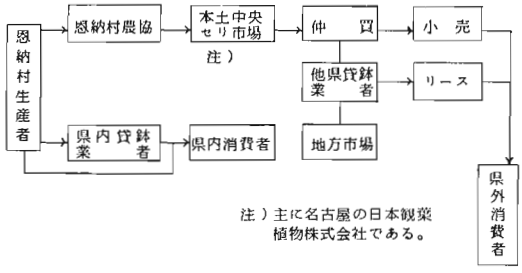
	昭51	昭52	昭53	昭54	昭55
作付面積（アール）	87	110	221	298	417
生産本数（千本）	40	44	56	118	95
生産額（千円）	10,377	17,400	43,189	43,939	88,216

表－3　恩納村の観葉植物価格表

種　類	価　格
三寸鉢	200～250円
四　〃	250～300〃
五　〃	350～450〃
六　〃	700～800〃
七　〃	800～1,000〃
八　〃	1,300～1,500〃
尺　鉢	価格は一定でない



図－1　恩納村・名護市・本部町位置図



図－2　恩納村の緑化木の流通経路